

# 明日香皇女殯宮歌の発想

— 永劫への庶幾 —

大久間 喜一郎

## 序 詞

古典の中で、明日香川（飛鳥川）ほど印象づけられてきた川はあ  
るまい。『枕草子』にも、

河は飛鳥川。淵瀬もさだめなく、いかならんとあはれなり。大  
井川。おとなし川。七瀬川。

とあって、「河づくし」の最初に挙げられている。そして、ここで  
も言われているように、淵瀬が絶えず変化する川として受取られて  
きた。それは仏教が教える無常観の譬喩的材料として恰好な自然現  
象でもあった。そうした例として、『古今和歌集』巻十八に見える  
次の歌は、古典文学の世界に、遙かな後の世まで、一つの類型的発  
想をもたらした。

世の中は何か常なる明日香川昨日の淵ぞ今日は瀬になる

（九三三、雑歌下、詠人しらず）

この類型発想は、同じ『古今和歌集』の明日香川を題材に取った五  
首の歌の中、三首にまで及んでいる。

明日香川淵は瀬になる世なりとも思ひ初めてむ人は忘れじ

明日香川淵にもあらぬ我が宿もせにかはりゆくものにぞありけ  
る

（九九〇、雑歌下、伊勢）

いずれも明日香川の淵が瀬に変わるといふ現象を踏まえた発想であ  
る。この中では伊勢の歌が新しい作品と思われるが、それだからと  
言って九三三番歌あるいは六八七番歌に原拠を求めるわけにはゆか  
ない。危気のないところで言えることは、『古今集』の明日香川の  
歌五首の中、三首までが九三三番歌の類型発想をもっているという  
ことは、またその中の二首が「詠人しらず」という古歌であること  
は、奈良朝中期以降から平安朝の最初期頃までにこうした類型発想  
が生まれる機運があったのではないかと仮定することができる。だ  
が、『万葉集』にみえる二十四首の明日香川の歌<sup>(1)</sup>にはこの発想をみ  
ることはできない。したがって、『古今集』九三三番歌の類型発想  
発生の機運は、一応、奈良朝末期以降、平安朝最初期頃までと認定  
するのが無難であろう。

ところで、このような発想とはまるで逆の発想が、同じ明日香川  
に寄せる発想として『万葉集』の中に存在する。それは巻二の挽歌

群の中にみえる人麻呂の「明日香皇女殯宮歌」である。以下、この殯宮歌発想の形式とその基底をなしている慣習的思考について愚見を述べてみたい。ただし、この歌群の場合は明日香川の本質に係るものでないことは先にお断りしておかなければならない。しかし、前述の『古今集』における類型発想にしても、淵が瀬になるという現象を、無常観をもって受け止めたということ自体は一つの主観に過ぎないのであって、明日香皇女の薨去が、たまたまその御名にかかわる明日香川観に、どのようなイメージをもたらしたとしても、それも一つの主観であると解し得る。そうした意味で、この二つの場合も、共に明日香川に寄せる発想として処理できると思われる。

明日香皇女殯宮歌

井に短歌  
明日香皇女木廬（あらののみや）の殯宮（あらののみや）の時、柿本朝臣人麿の作る歌一首

飛鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 石橋渡し（いしは）し 石並み（いしなみ） 下つ瀬  
に 打橋渡す 石橋に（いしは） 石並み（いしなみ）に 生ひ靡ける 玉藻もぞ 絶ゆ  
れば生ふる 打橋に 生ひををれる 川藻もぞ 枯るればはゆ  
る 何しかも わご王の 立たせば 玉藻のもころ 臥せば  
川藻の如く 靡かひし 宜しき君が 朝宮を 忘れ給ふや 夕  
宮を 背き給ふや うつそみと 思ひし時 春へは 花折りか  
ざし 秋立てば 黄葉かざし 敷袴の 袖たづさはり 鏡なす  
見れども飽かず 望月の いやめづらしみ 思ほしし 君と時  
々 幸して 遊び給ひし 御食向ふ 城上の宮を 常宮と 定  
め給ひて あぢさはふ 目言も絶えぬ 然れかも 一（い）に云ふ、あ  
やに悲しみ ぬえ鳥の 片恋婦し（い）つ（い）つ（い） 朝鳥の 朝霧（あさぎり）の 一（い）に云ふ、通

はす君が 夏草の 思ひ萎えて 夕星の か行きかく行き 大  
船の たゆたふ見れば 慰むる 情もあらぬ そこ故に せむ  
すべ知れや 音のみも 名のみも絶えず 天地の いや遠長く  
偲ひ行かむ み名に懸かせる 明日香河 万代までに 愛しき  
やし わご王の 形見かこころ (一九六)

短歌二首

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし  
一（い）に云ふ、水のよ  
どにかあらまし  
明日香川明日（い）だ（い）に（い）さへ（い） 見むと思へやも 一（い）に云ふ、わご王の御  
名忘れせぬ 一（い）に云ふ、御名 忘らえぬ (一九八)

明日香皇女は天智天皇の皇女で、母は阿倍倉梯麿の女橘姫。皇女は文武四年（七〇〇）四月四日に亡くなられた。橘姫については、「天武天皇紀」十年二月の条に、「戊辰（二十九日）、阿倍夫人薨。」とあり、「三月庚午朔癸酉、葬阿倍夫人。」とあって、これが橘姫であることはほぼ誤りないところと思われる。そうすると明日香皇女は、天智十年（六七二）十二月に五十八歳で崩せられた天智天皇の、仮に最後の年の御子であったとしても、亡くなられた文武四年は満二十九歳に当たる。だが実際はこれより十五歳位年長であったろうと想像される。なぜなら、同母妹に当たると考えられる新田部皇女が天武妃となって生んだ舎人親王は、天平七年（七三五）に六十歳で薨せられた。逆算すれば親王は天武三年（六七五）の出生となり、新田部皇女がその時十八歳以上と仮定すれば、皇女が薨去された文武三年（六九九）には四十二歳以上となる。したがって、この方の姉君である明日香皇女は、亡くなられた文武四年には少くと

も四十五歳前後であったと考えられるからである。

このように、明日香皇女の没年を四十五歳前後と推定すると、人麿の殯宮歌に叙せられている内容は、中年に近い一人の高貴な婦人の、優雅で安定した生前の生活を歌ったものとして、いかにもふさわしい趣きをもったものであることが納得される。

今、この長短歌の発想を分析しようとする前に、その構成について考えてみたい。それは大体、次のように組立てられていると言える。

△長歌▽

序章（死と復活のプロローグ）

皇女の死

朝宮・夕宮（現世）からの別離。

愛着のある城上の宮を常宮とする。

背の君の悲嘆。

結章（明日香川を御名代と見立てて、皇女の御名の永遠性をたたえ

る）

△短歌▽

皇女の長寿ならざるを悼む。

明日香川に寄せて、皇女の御名の不滅を庶幾う。

死と復活

人麻呂はこの長歌の序章を明日香川の玉藻から語り初めて、「靡かひし宜しき君が」と、次第に皇女の身の上へ及んでゆく。人麻呂が長歌の序章に玉藻を持ち出しているのはこれだけではなく、巻二挽歌、一九四の「泊瀬部の皇女忍部の皇子に献れる歌一首」、同じく巻二相聞、一三一・一三五・一三八の「石見の国より

妻に別れて上り来し時の歌二首」および「或る本の歌一首」などがある。しかし、これらの長歌の序章における玉藻の役割は、概して夫婦の睦まじい関係、あるいは良人に対して従順な女性のイメージを思い浮かべる譬喩としての役割だけであった。この明日香皇女殯宮歌の場合も、そうした手段として使われていることは同様であるのだが、この場合は他の歌には見られない、玉藻自体の生息とでもいうような二つの句が意味ありげに挿入されている。「玉藻もぞ絶ゆれば生ふる」「川藻もぞ枯るればゆる」という表現における二つの傍線の部分である。今、意味ありげにと言ったが、これはむしろ明瞭な意味があると言ひ改めるべきであろう。それは既に述べたところだが、「立たせば玉藻のころ」と言ひ、「臥せば川藻の如く」と言ひてきて、共に「靡かひし宜しき君」へ係る以上は、「玉藻・川藻」が皇女その人の寓意表現に違いないのだから、前述の傍線二句は皇女の薨去という現実が、やはり玉藻・川藻とは異なっているのだという人麻呂の意識の下において、玉藻・川藻と皇女とは擬似的な関連をもっているのである。因みに「靡かひし」を「靡き合ひし」の意味にとれば、この関連は皇女の背の君にまで及んででき、甚だ曖昧な構成になつてくる。

人麻呂がここで言っている「絶ゆれば生ふる」「枯るればゆる」という表現の内容は、まさに植物における死と復活の思想に他ならない。植物は一般に、絶えても枯れても再生するものという觀念を人々が有っていた。人麻呂の表現はこうした世間的通念を歌句にしたに過ぎない。これは人麻呂の新たな発見ではない。玉藻や川藻に限ってそうであるとは考えられないが故に、一層人麻呂の発見だとは言ひ得ない。冬になれば枯死し、春になれば新たな生命に

燃えて生長するという、植物に対する一般的な通念というものを、人麻呂はただ玉藻・川藻にも当てはめて述べただけのことである。この文脈は

玉藻もぞ絶ゆれば生ふる……川藻もぞ枯るればはゆる 何しかも……朝宮を忘れ給ふや 夕宮を背き給ふや

という繋がりをもつ。つまり、玉藻や川藻なら枯死しても再生し、永遠の死というものが無いはずなのに、どうして皇女は現世を去ってしまうのか、という表現なのである。

私はかつて「古代文学にみる靈魂観<sup>(3)</sup>」という小論の最初の方で、人間が輪廻転生を信じ、その必然的根拠として靈魂の存在を認識する必要に迫られたのは、恐らく、枯死と再生とを繰返す植物の生態に学んだ知恵であったのだろうという意味のことを述べたことがある。玉藻・川藻の生態について人麻呂の表現した二つの句の意味が、序歌を繋げてゆく上での単なる形式的・裝飾的歌句ではなくて、皇女の死と密接なつながりを意識しての句であったということを再び強調しておきたい。

朝宮・夕宮と常宮 「朝宮を忘れ給ふや、夕宮を背き給ふや」という対句表現は、既に述べたように「現世の生活を捨て給うのか」といった意味になる。これは「何しかも」という疑問句を直接に受けているところから、形の上では詰問の調子をもってくる。しかし、死があくまでも不可抗力なものである以上、どのように強い詰問調をもってしても死に打ち勝つことはできない。そこに絶望的な悲しみが湧きあがるのを計算しての上の表現なのである。また、その朝宮・夕宮というのも、皇女が生前に暮らした宮殿を単に対句として表現したに過ぎないものなのであろうか。先に私はこれを現世

の生活というふうに理解した。だがそれは、現代風に解釈するとそのように理解されるという理由からばかりではない。人麻呂は次の「城上の宮を常宮と定め給ひて」と照応させていると考えられるからである。

「常宮」は、今は殯宮となった城上の宮である。それは死の象徴となった殯宮である。つまり、死の宮殿が常宮なのである。常宮というのは、字義に従って解すれば、永遠にして不変の宮殿の意である。「常闇」とか「常世」とかの意味を考えるまでもなからう。この常宮という語は、同じ人麻呂の挽歌「高市皇子尊殯宮歌」の中にも見える。人麻呂はこの「常宮」という語において、死を求遠のものとして捉えたのである。そのように考えてくると、「常宮」と対照的に用いられている「朝宮・夕宮」は、死の世界に対する生の世界であり、不変なるものに対して変容するものであり、無限に対する有限である。変容と有限の相を感じてこそ、人麻呂は「朝宮」と言い、「夕宮」と表現したのであって、形式的な対句として並べられたものではないと思われる。

万代と永遠と この長歌の末尾において、「天地のいや遠長く偲ひ行かむ」と言い、「明日香河万代までに」と歌っていることは、明日香皇女という対象を超えて、人麻呂自身の永遠への憧れであり、永劫への庶幾と見ないわけにはいかない。

ここで「天地のいや遠長く」というのは永遠を意味しているのであろう。また、「明日香河万代までに」という表現は、明日香河が天地を構成する要素としての自然現象である以上、「万代」という語に「永劫」に近い観念を人麻呂が懐いていたということは言えると思う。尤も人麻呂ばかりではない。

天地と 長く久しく 万代に 変らずあらむ いでましの宮

(三一五、旅人)

もししきの 大宮人は 天地 日月と共に 万代にもが

(三三三、四、未詳)

万世に照るべき月も雲隠り

(二〇二五、未詳)

秋津の川の万世に絶ゆること無く

(九一一、金村)

などのように、大自然との関連において万代(万世)の観念は大方人麻呂以降の作者たちにも存在した。だが、人麻呂の「万代」は意外にもそれほど頻繁には使用されていない。

わご王の 万代と 思ほしめして 作らしし 香具山の宮 万代に 過ぎむと思へや 天の如 ぶり放け見つつ

(一九九、高市皇子尊殯宮歌)

が極めて印象的な用例である。日並皇子尊の舍人らの作を、もし人麻呂の代作と数えるなら、その中の一首を指摘することができる。一七一番の歌である。このように人麻呂の作品に用例が僅少であるところから、断言するのは大胆に過ぎるが、人麻呂の「万代」の意識は恐らく宮廷讃歌・宮廷挽歌の場のみ在り得たものではなかったか。「万代」ではなくて「常世」という語ではあるが、これも「新田部皇子歌」という宮廷讃歌の系列に存在するのである。

このように、永遠・永劫の意味をもつ人麻呂の「万代」が、少数例であればある程、「明日香皇女殯宮歌」における永劫庶幾の感は切実であったとしなければならぬ。そのような現実的な感懐ではないとしても、そこに作意を集中せしめた点は、この作品の特色だと言えるだろうと思う。

### 短歌一九七 短歌と反歌

人麻呂の宮廷挽歌の中で、長歌に付随する歌を反歌

と記しているのは「日並皇子尊殯宮歌」「献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌」の二つの場合で、これを短歌と記しているのは「明日香皇女殯宮歌」「高市皇子尊殯宮歌」の二つの場合である。長歌に付随する歌を「反歌」あるいは「短歌」と称することについては、同じ積りで使用しているのか、あるいは区別をつけているのかということには、詳しく調べていない以上、性急に断定はできないが、やはり区別があったものだと思う。それは「日並皇子尊殯宮歌」の反歌と或本の歌とを比較すると、反歌二首の方は長歌のテーマに沿っているが、或本の歌は付随的な内容である。そして、それの方には「或本の歌」とあって「或本の反歌」とは記さない。また、「高市皇子尊殯宮歌」の場合は短歌二首が付随しているが、更に「或書の反歌」が一首加えられている。そして殯宮歌というテーマからすれば、「或書の反歌」の方がテーマに沿っている。ただし、これらの関係は微妙であって簡単に断言はできない。同じ万葉の中でも時代による意識の違いもあろう。原資料や編者の態度も考慮しなければなるまい。しかし、少くとも巻一・二の中では、反歌という場合は、短歌と称される場合よりも、内容的に長歌と密着しているものを指しているのではないかと思われる。

以上のようなことが言えるとすれば、この「明日香皇女殯宮歌」の短歌二首が皇女の死そのものに言及していない点について、幾分なりとも納得できる。反歌が納め歌として凝集的なものとするれば、この場合の短歌などは羅列性をもつ拡散的なものである。今、そうした予期の下に一九七の短歌について考えてみたい。

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし  
この歌は何を言おうとしているのだろうか。明日香川を皇女に見立

てていることには間違いない。それならば、緩やかに流れる水とは何を意味しているのだろうか。

明日香川にしがらみを渡して水をせきとめたならば、流れる水もゆったりとしていることであろうに。

これは日本古典文学大系本の頭注として掲げられたこの歌の大意である。山田孝雄博士は『万葉集講義』の中で、この歌の大意を述べ、その後が続けて次のように言う。

その如くその川と同じ名をもたせたまへる皇女の御命をせきとどめ奉る方法もあらばそれを構へてとどめ奉らましものを、さる手段も由もなかりしものかとなり。

山田博士のこの解釈は、「しがらみ渡し塞かませば」の句に視点を置いたものであって、「流るる水ものどにかあらまし」の解釈については明らかでない。また、土屋文明氏は『万葉集私注』の中で、この歌の作意に触れて次のように述べる。

恐らくながるる水といへどもしがらみでしばし速力をゆるめることが出来ように、人の命は留め得ぬものかなといふ意がこめられてあるのであろう。

この歌の解釈について、山田・土屋両氏の説を掲げたのは、緻密な国語学者の所説を『万葉集講義』に、歌人的直観による真実の把握を『万葉集私注』に求めるためであった。やはり私はこの一九七番歌の解釈は土屋文明氏のようにあらねばならないと思う。明日香川は流れの早いことで知られた川である。「しがらみ」は水流を緩める前提としての手段に過ぎない。この歌は「皇女が明日香川であったら、しがらみを渡して水流を緩めることができるように、皇女の寿命を延ばすことができたであろうに」という意を内蔵している

ものと思われる。川水は皇女の寿命の比喩として受け取れる。ここにおいて、私たちは人麻呂の懐いていた寿命観というものを漠然とした形ながら知ることが出来る。

人麻呂の寿命観——それは人麻呂だけではなかったかも知れない。人麻呂時代の人々なら誰もが漠然と感じていた最大公約数的な寿命観であったかも知れない。それは人間の寿命に長短を考えるような思考形式ではなくて、寿命というものは恐らく長さとしては一定であり、誰でも同じ寸法である。ただ、ゆったりと生きる人は時間的に長命ということであり、慌しく生きる人は短命であると考えていたのではないか。例えば、川の長さ一〇〇〇メートルの部分を一〇分で流れる水流もあれば五分で流れる水流もある。これを人間の寿命に譬えるなら、一〇分で流れる水流を普通の寿命とすれば、五分で流れきる水流は短命な人の寿命に当てはめられる。つまり、人間の寿命を非時間的なある長さに決めて、それが生き方によっては、早く終着点に着いたり、ゆっくりと終着点に着いたりするものという思考形式が根底にあったに違いない。現代人は単なる寿命の長短より、如何に生きたかという生き方の内容を問題にしたがる。この場合は、たまたま人麻呂がこうした発想を思いついたというのではなくて、現代人ならこうした発想はどうしても思い付かないだろうということ強調したい。

短歌一九八 この歌にはいくつかの問題があると考えられる。それは「見むと思へやも」の解釈であり、また、これに関連するこの歌の異伝の扱いである。異伝は三ヶ所に細注の形で記されているので、今、異伝それぞれを生かせば八通り程の形になるが、歌意を考察する上から言えば徒らに繁雑となるだけなので、正伝と異伝とを

二つに分けることにすれば次のようになる。

明日香川明日だに見むと思へやもわご王の御名忘れせぬ

(正伝)

明日香川明日さへ見むと思へかもわご王の御名忘れえぬ

(異伝)

さて、ここでこの歌の解釈であるが、まず第一句の「明日香川」については、今日ではこれを序詞とみるのが通説である。だが山田孝雄博士などの場合ははっきりしないし、土屋文明氏などでは「見む」の目的語として、明日香川を見るところというふうに解している。一般には、第二句が「明日だに見む」となっているので、これを序詞と決めておくだけで、実際には序詞だという証拠はどこにもないのである。この前の歌の一九七歌では、「明日香川」がやはり第一句に置かれているが、この場合は第二・三句の目的語としか考えられないのである。この一九八番歌に限って「明日香川」を単なる序詞であると決めなければならぬ積極的な理由はない。巻十一の二七〇一番に

明日香川明日も渡らむ石橋の遠き心は思ほえぬかも

という同形の用法があるが、これなどは「明日香川」を序詞に解してしまつたら、不完全な内容の作品になる。したがって、私は一九八番歌の「明日香川」の場合、第二句に同音の語を重ねただけであつて、これを序詞と考へないでもよからうと思ふのである。

次は「思へやも」が問題になる。「思ふ」の已然形に係助詞の「や」を加え、更に詠嘆の「も」の接した形が「思へやも」という連語である。山田孝雄博士はこの句を注して

「モ」は意軽くして「ヤ」の疑の意が主となれるなり。され

ば、これは後世の語ならば「オモヘバヤ」といふに同じ關係にあるものなり。(万葉集講義)

と説かれる。つまり順接確定条件の条件句だということである。しかし、その「や」については、これを疑問の意と考へていたことは、意解の中で「わが心の奥に思へばにや」としていることによつて明白である。しかし、現今では已然形に添う「や」は反語と解されるのが当然だとされるようになってきた。元来、已然形というのは「前件句と後件句を順接させる作用がある」といわれ、<sup>(4)</sup>「已然形が接続助詞を後に従えることなしに、既定の条件を表わすことが、以前は可能であつたという事実」<sup>(5)</sup>「その既定条件は多くの場合、順接のようである」といわれる。そうした性格をもつ已然形に係助詞「や」の添った形をもつて、反語的内容をもつた順接確定条件の条件句であるとすれば、次のいくつかの例などからその訳法は定まつてくるはずである。

打ち麻を麻統王海人なれや伊良真の島の玉藻刈ります (二三)

作らしし 香具山の宮 万代に 過ぎむと思へや 天の如ふ

り放け見つつ (一九九、人麻呂)

前者は「麻統王は海人であるから……玉藻を刈っていらつしやるのだからか。いや、海人ではないのに……」という訳になる。後者は条件句と照応する結びの句を欠いた場合で、「永遠に徒らに存続すると思おうか、そうは思わない」という訳文が可能である。三二番歌の高市古人の

古りにし人(古の人)に我あれや楽浪の故き京を見れば悲しきも、二三番歌と同様な訳法が可能である。ただ、ここでは古人の名が「古りにし人」へ掛けられているようである。また、一六八八の

「焔<sup>あま</sup>り干す人もあれやも濡衣を家には遣らな」などは、前記一九九の如く結びの句を欠いている例であって、同様に処理できる。

さて、以上のような諸例からこの明日香川の歌を考えると、次のように理解される。

せめて明日だけでも（お目にかかろうと思うので、わが明日香皇女のお名前を忘れはしないのだろうか。いや、）お目にかかれるとは思えないのに、わが明日香皇女のお名前を忘れはしないのだ。

右は通説に従って、第一句の「明日香川」を一応序詞とみての訳である。このカッコの部分の切り捨てると、日本古典文学大系本の大意とかなり似通ってくる。ところで、「せめて明日だけでもお目にかかろうと思う」という訳文の論理は、殯宮に安置されている皇女を考えると、辻褄の合わないことばになる。山田博士のように、「即ち今日は見え奉らずとしても」に類するような前提を置いてみても納得はゆきがない。やはりこれは考え直す必要があると思われる。そこで、その最初に土屋文明氏の言うところに耳を傾けてみよう。

初句のアスカガハを単なる序詞と見るために、第二句のミムは女王を見る意味となり、それから引いて、第三句のヤモが反語か、単なる疑問かについて、二流の説を生じて居るのであるが、第一句を実質的の句とすれば、語釈の項で述べた如く割合に解し易くなるのではあるまいか。（万葉集私注△傍線筆者△）

初句の「明日香川」を序詞と見なければならぬ積極的な理由がないことは既に述べた通りである。右の文中、筆者が傍線を付した部分については、佐伯梅友・沢瀉久孝氏らの強調する反語説以降のこと

なのか、あるいはそれ以前の旧説も含めて土屋氏がこのように述べているのか、その点は不勉強でよく判らないのだが、已然形に係助詞「や」の添った用例の中で、少くとも次の例などは反語でなくて疑問の意味で使用されている。

背の山に直に向へる妹の山事許せやも打橋渡す

（巻七、二一九三）

この「事許せやも」について、古典文学大系本では、「背の山が通ってくることを許したのか」というふうには、疑問の意を含む順接確定条件の句として扱っている。つまり、この場合「事許せやも」は「事許せかも」と同じ意味であると見られる。

以上述べてきた諸点を整理すると、この一九八番歌の場合は、初句の「明日香川」を序詞としなければならぬ理由は一切ないこと。「思へやも」を反語の意味を含む順接確定条件句とすることが絶対唯一の文法的説明とはならないことなどである。そこでこのような修正意見に極めて近いと思われる土屋文明氏の一九八番歌の「大意」を提出しておこう。

明日香川をば、後々といはず明日にですらも、すぐ見ようと思へばであろうか、その明日香川に因みある、女王のみ名は忘れはせぬ。明日も又それから後も常に見ると思ふ川にかけられたみ名である故に。（万葉集私注）

一九八番歌の正しい内容は、この土屋文明氏の大意における如きものであるかと私は考える。だが、細部については異見もある。例えば「明日だに」の「だに」などはやはり「セメテ……ダケデモ」であろうし、異伝としての「明日さへ」の方は、「今日ダケデナクテ明日モ」の意味であろう。「思へやも」は前述したように、土屋



氏の解釈が誤りであるとは言えない。否、むしろ、疑問を含む順接確定条件句であると考えることによって、異伝句「思へかも」は意味の上で「思へやも」と等しいからこそ、そのようにも言い換えられるようになったのだろうと言いたい。

明日香川をせめて明日だけでも見ようと思うからか、それでわが明日香皇女の御名を忘れることはしないのだ。

(正伝歌の口語訳)

明日香川を今日だけでなく明日も見ようと思うからか、それでわが明日香皇女の御名を忘れることができないのだ。

(異伝歌の口語訳)

右は結論としての口語訳だが、このように正伝歌と異伝歌との差は僅少である。「思へやも」を反語の意を含む条件句として解釈すれば、正伝と異伝との間は大きく開いてくる。もしそれが伝誦過程における変化だとすれば珍しい現象だと言わなければならぬ。武田祐吉博士は

別伝として「一云念香毛」とあるのも、既に反語としての用法を忘れるに至って、たやすく歌い代えられたものである。

(万葉集全注釈)

と述べてこの問題に一つの解決を与えようとしている。しかし、前述したように「思へやも」を反語とみて、この歌を解釈するのには無理がある。それに、「や」自体が反語としての意味をもつ以前には、本来は間投助詞であったともいわれている。要するに、初句の「明日香川」を序詞ではないとすると、どうしても「思へやも」を疑問としなければならぬ。その点、文法は既製服のようなものである。いくら標準寸法だからといって体型に合わないものを無

理して着るわけにはいかない。文法は公式ではないと私は考える。

永劫への庶幾 さて、それならば次に「明日香川を明日だけでも見よう」あるいは「明日香川を今日だけでなく明日も見よう」という気持が、なぜ「明日香皇女の御名を忘れない」という結末になるのであろうか。それは次のように理解される。明日香川を明日だけでも見よう（あるいは、明日も見よう）という意志があれば、明日の累積はおのずから永遠の未来へつながるからである。永遠の未来を希求する心は、太古から人間と共にあった。石造の宮殿も墓石も、エジプトのミイラも、中国の仙術もすべて永遠への幻想がなせる業であった。永遠の希求・永劫への庶幾、それは現代の人間たちも決して忘れてはいない。ただ、現代のわれわれは変転・進化の法則の彼方にそれを求めている。万物は総て変転の相を辿りつつ永遠へ向って歩んでゆく。もはや我々は、我々自身あるいは我々の名や業績が、現在の形のまま永遠に続くなどという夢を懐くことはあるまい。ところが遠い古代の人々は、そのままの形をもって永遠に実在することを期待した。しかし、現実には諸行無常・盛者必滅の相を繰返すのみである。それに対するはかない抵抗にも似た素朴な手段が、遺体の保存とか御子代・御名代の設置という形となって現れた。万葉歌にしばしば見える「語りつぐ」「言ひつぐ」という行為も、永劫への庶幾を根底に置く実践に他ならなかった。遠い未来への見通しを、変転の相の彼方に求めるのではなくて、今日の現実・明日の現実を積み重ねて、そのまま遠い永劫の彼方へもたらそうという試みは、少くとも仏教の教える無常観以前のものではあった。人麻呂の「明日香皇女殯宮歌」の発想を支える思考形式も、まさにその通りではなかったかと思うのである。

(47、12、25)

(付記) 四十七年六月二十四日、古代文学会大会において口頭発表を行なった際、渡瀬昌忠氏その他の方から貴重な御教示を頂いた。今、文章に改めるに際して、それを意識しながら、多少アクセントを変えた点もある。

注

(1) 明日香川に寄せる歌を万葉の中から拾うと、およそ次の二十四首になる。

(卷二) 二四、二六、二七、二九

(卷三) 三三、三五

(卷四) 六六

(卷七) 二二、二六、二七、二九

(卷八) 一五

(卷十) 二八、三〇

(卷十一) 三〇、三二、三三

(卷十二) 六六

(卷十三) 三七、三六、三七

(卷十四) 三三、三五

(卷十九) 四三

これら明日香川の表記は、明日香河・飛鳥川・飛鳥河・明日香乃河・日香之河などがあるが、特に区別しては扱わなかった。

(2) 「靡かひし」は原文「靡相之」とあって、古典大系本の大意では「互になびき合った」と記しているが、「靡かひ」の「ひ」は所謂継続の助動詞であろう。継続の助動詞「ふ」を含む連語の表記に「相」を使った例は「秋の田の穂の上に霧相朝霞」(八八)、「雲間より渡相月の」(三五)などがある。

(3) 拙著『古代文学の源流』(桜楓社刊)所収。

(4) 春日和男「万葉集の文法」(『日本文法講座、解釈文法』明治書院)

(5) 佐竹昭広「上代の文法」(『日本文法講座、文法史』明治書院)